
東方吸血鬼

ふれいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方吸血鬼

【NNコード】

N5449Z

【作者名】

ふれいむ

【あらすじ】

彼は世界で最後の吸血鬼だった。彼の力は皆から恐れられ、すべての人間から追われた。彼は世界から捨てられて、彼も世界を捨てた。彼は自ら幻想の存在となつた。

ついた先は遙か昔、彼は第一の人生をどう生きる?

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる

俺には力があった、人を超えた力があった。圧倒的な強さ、子供が持つには大きすぎる、絶対という言葉で形容されてもおかしくはない力を持っていた。正確には、もとから持っていた力と、与えられた力。

けれどもそれで手にするものは、何もなかつた。あつたのは俺を異端扱いする眼だけ。

ただ忌み嫌われて、追われて、居場所がなくなつて。どうしようもなくなつて逃げた。

それを、みんなは煙たがるように自分たちから遠ざけた、俺は一人だった。

この原因はなぜか？ 俺が吸血鬼だからだ。既におどぎ話となつている存在。俺はそんな存在であった。

俺は十四歳の冬の日、この世の最後の吸血鬼になつた。

西暦4039年、今年で俺は2050歳。既に成長は中学生のうちに止まり、老化も止まる。

翼が生えてきたのはいつだつたか、俺の今までの人生を血で塗るかのような深紅の翼。爪も牙も鋭くなり。日光、流水、純銀、同時に弱点も生まれた。

黒く、地面につくほど長いコード。顔を隠すフード。ただし、翼を通す穴だけは開いていた。

それは、俺が夜に紛れる為の。黒に染まるためのものだつた。
左頬の金色の痣、三つ巴を描くそれは吸血鬼の証。レミリアにはこんなものないが……理由はわからない。

世界が俺を捨てたように、俺も世界を捨てた。

俺は遙か昔、とある存在と出会った。

「東方Projectというゲームの世界、きっかけはどうに忘れてしまったが。

「幻想郷はすべてを受け入れる」、その言葉は彼にとって何とも言えない響きを持っていた。

もし、これが本当にものだったなら……俺だって受け入れてもらえる、異端として追い立てるのではなく、一つの存在として受け入れてもらえる。それを夢見てた。

吸血鬼が実際に受け入れられている世界、俺は望んでいた。そう、こうして2000年間の間、俺はすべてに忘れ去られるように、日の当たらないところで死に近い生活をしていた。

もし、それが本当に存在するものだとわかった時は、どれだけ感涙に浸つたことが。

俺は、その理想郷を目指すよくなつた、誰でもない、自分の居場所を求めて……

そしてある日、俺はたどり着いた。全てを受け入れる理想郷への扉を見つけた。

そして、今夜が決行の日。

俺は自ら幻想への扉を開く、不可視にて、その存在が絶対な。それ

を

その日、世界から一人の青年が、幻想の存在となつた。

気がつけば俺は見知らぬ場所にいた。今は夜か、星空がきれいだ、俺はこのままこの輝きを見ないで、束縛された永遠をただ生きるだけの存在として生きるはずだった。その輪廻から俺は抜け出した。俺はたどり着いたんだ。

ここは神社の境内か。田の前に建物があるのに歩き出せない。けれどもここは幻想郷のどこだろう？　どこかで見たことがあるような気がする。しかし考える暇を時は与えてくれなかつた。

疲れという抵抗不可のものが、俺に襲いかかる。おれはその場に崩れ落ち、眠りに落ちた……

傍に、憧れの存在を目指した。黒い日傘が音を立てて落ちた。装飾も何もないシンプルなそれは、彼の性格を物語つていた。

そして、入れ違いになるように神社の障子が開かれ、彼を見つけ出し、中へと運び込んだ。

彼の日傘を見て、不思議には思つたけれども考えないことにした。ただ、彼を保護したのであった。

温かい、ぬくもりを感じる、これが遙か昔に俺に向けられなくなつた感情なのか？

今ではそれさえもわからない。ここはどこなんだ？

冷静になつて今の状況を見てみる、ここは……おそらくさつきの神社の中であろう、どことなくそれらしい雰囲気が漂つている……足音が聞こえるな、俺を助けてくれた人であろうか？ だとしたら助かった。

あの日差しの中に取り残されていたら俺は今頃灰になつていただろう。これは、俺が受け入れられたということか。なんだか嬉しいな、涙が出そうだ。こういう風に泣きそうになつたのは何年振りだろう？

俺は、これを求めていたのか。しかし、みつともない姿を見せるのは少し嫌な感じがするな、堂々としておこうか。

そうして部屋に入ってきたのは、俺の予想もしない人物だったけど。そう……

「（諭訪子様……だと……）」

そう、どこからどう見てもあの東方の洩矢諭訪子だったのだから。驚きを通り越す。

「目が覚めたみたいだね、元氣かい？」

「ああ、助けてくれて感謝する」

ああ、さすがにいきなり名前で呼ぶわけにはいかないからってなんて言おうか考えてたら……てんぱつて無愛想になってしまった。

「私は洩矢諭訪子、あなたはなんていうの？」

「俺か？ 人間だったころの名前は千年以上も前に捨てた。それ以来名前なんか使う機会なかつたし、そんなものはない」

諭訪子は驚き、特に千年のところで大きく驚いた。確かに俺はかなり年上なんだろうけどさ。未来人だけど。

そしておそらく興味本位で聞いてきたのだろう。どうしてそんなことになったのかとな。

「ねえ、よかつたらあんたについて詳しく教えてくれない？　お近づきのしるし」「元」

「別にかまわないけど、あまり気分がいい話とはお世辞にも言えない。それでもいいのか？」

それに本当のことをするべて話すのはできない、ここが東方とこう世界だということに関しては本人たちが知つてはいけないことだらう。なぜだかそれだけはわかる。

「別にいいよ、話してもらえるだけありがたいんだから」

俺は少し間をおいて、ゆっくりと全てのことを話しだした。

多少変えてはいるが、東方の存在を知らず、気が付いたらここにいたといつことにしておけばいいだらう。それでも十分筋は通った話にはなる。まあ、これが俺の腐りきった人生さ。

長い間話した、醜いことをすべて吐き散らした、残ったのは空っぽの器だけだった。

そして、諭訪子がゆっくりと口を開いた。

「じゃあ、よくわからぬけど、じつでみんなに受け入れてもらえばいいんじゃない？　最低でも私はあんたの味方でいてあげるからぞ」

「そうか、ありがと」

満足した様子で、彼は笑みを浮かべた。それは、彼の人生の中で、

一番綺麗なものだった。

「じゃあ教えてくれないか？　今度は君の事を」

彼の大きな疑問、それは、ここが守矢神社なら本来いるべきあとの二人がないこと。彼はそれを自然に聞き出そうとした。そして得た答えはとてもではないが考えられないものだった。

「こは、幻想郷ができた時代よりはるか昔、諏訪大戦よりも少し昔であったのだから。

彼は驚きはしたが、悲しみはしなかつた。だつて彼が得られる結果はどうやらでも変わりはなかつたのだから。

「とりあえず、うちで暮らしていかないかい。あんたがいると退屈しなさそうだ」

言葉の奥には、同情とはまた違う意味が込められていた。神と人間との差を理解している彼女だからわかる、種族の違いという壁の辛さ。それを彼に感じたからだった。

「そうか、だつたら好意に甘えるとしよう。これからよろしく頼む。わかっているとは思うが、精神が死に切つた世捨て吸血鬼だが、それなりに役には立つだろう」

自分で自傷していても、何も感じない。それは成長なのか退化なのか？

「じゃあさ、名前を決めようよ。ここで暮すんだからあんたじゃ不便だしさ。どうだい、自分でかつこいい名前でもつけてみたらどうだい？」

「名前か、考えたことはあまりなかつたな……いつそのことこの吸血鬼としての力からとつてしまおうか。そうだな、紅羽あかはね霧きり、こう名乗らせてもらうか。自分という吸血鬼はここにいるという意味としておこう。この名前が俺の存在の証明となるように」

「いい名前じゃないか、じゃあ早速信頼の意味でご飯にしよう。何か食べたいものはあるかい？」

……正直に言つたらまずいよなあ、人間の血液、できれば若い人の希望なんて。

ここは適当な動物で我慢するしかないのか。さすがに自分の領土の人間が被害にあっていい顔はしないだろう。けどなあ、俺千年単位で血を摂取してないわけで、できれば人のやつがいいんだけどなあ。まあ贅沢は言つてられないか。

「……食べ物ならなんでもいいけど、できれば動物の血でもあるとうれしい」

「ああ～なるほど、仮にも吸血鬼つてことなら……今から適当に猪でも捕まえてくるから待つって」

……以外に野生児な神様だつたんだな、諏訪子つて。まあ以外といふわけでもないけど、むしろ妖精とかと一緒に遊んでそうな雰囲気あるし。

まあ昼間は迷惑かけちゃつかもしないけど、基本夜型だし、大丈夫だろう。

さて、いじは信頼の証が来るのを待たせておきましょう。

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる（後書き）

はじめましての方ははじめまして、他の小説を読んでくださっている方は、「無沙汰します、ふれいむです。」

今回は過去転生最強ものに手を出してみました。どうかこれからもよろしくお願いします。

感想指摘評価、なんでも待っています！

男は自らの忌み嫌われた力を見る

食事の時間が終わった。

言つた通り本当に猪を捕まえてきた諭訪子、ちなみに久しぶりに飲んだ血でテンションが上がり、一敵残らず飲み干してしまった。

とりあえず今は、案内された日光を完全にシャットアウトできると いう部屋にいる。

そこで諭訪子とこれからのこと話を話し合つつもりだ。

しかしこの時代でもう日光を完全に遮ることができなんて、案外建築技術は昔からの受け売りなのかもしれない。

そんなことを考えているうち、諭訪子が口を開いた。

「じゃあさ、とりあえず霧は夜型なわけだ、じゃあ私が寝てる間に霧が活動をして、昼間はその逆になるってことだね」

「ああ、日が沈んでいる間は俺も自由に行動できるから、今日みたいなことはしなくても大丈夫だ、適当な動物でも襲つて食べてるさ」

諭訪子は一瞬迷った顔をしてから答えた。

「人間じゃないんだね」

「さすがに諭訪子の領土で他の吸血鬼を作るつもりはないさ、いや、永遠に作るつもりはない。人間の血が足りなくて、禁断症状らしきものが出来たら、適当にこいつそり抜き取るさ。牙を使わずに。まあそんなことはめったにないが」

だけど、千年以上まつたく活動しないことによつて今まで耐えてきたのだ、どうなるかはわからないが……

諏訪子は俺の事情を知つてゐるだけあってすぐに納得してくれた、俺が自分と同じような境遇の人間を作りたくないといふことを悟つてくれたのだらう。

「とつあえず、夜と昼の境目の短い時間しか話はできない。けれどもどちらも一日寝なごくらごどつてことないからな。そこは問題がないだらう」

神も吸血鬼も一日一日の徹夜でへばつたりはしない。その気になれば、諏訪子はずつと寝なくとも大丈夫だらう。俺はやばくなるけれども。

とにかく、夜型と昼型の同居でも、まったく問題がないわけだ。

「じゃあさ、もしいいんなら霧の力を見せてよ。人間から追われるほどの力を見てみたいしさ」

……なるほど、確かに気になるな、という方が無理かもしれないな。けれども……いや、ここはすべてを受け入れるのだから、俺の力はむしろ知つてもらつた方がいいだらう。その方がいざといふ時に役に立つかもしれない。

そのとき諏訪子は、考え方をしてくるときに霧の翼がぴくぴく動くといふかわいらしき癖を見つけた。もちろん内緒にするが。いざといふ時にばらすつもりであるだ。

「わかった、じゃあ今夜、日が落ちたら見せてやる

「じゃあ今はとりあえずここここな、何かあつたら呼んでちょうだい

諏訪子は部屋から出て行った。

残されたのは静寂だった、しかし、ここには俺の隠れ住んでいた場所の静寂とは違う。あくまで静まり返る中に、目に見えない光があった。

本当に、諏訪子の優しさに感謝する。もし境内で灰となつて一生を終えていたら、自分は浮かばれなかつたであろうから。

「さて、夜まで眠つておこうか、久しぶりの夜を満喫するためにも

俺は早速、丁寧にひかれていた布団に入つて眠りについた、まだ疲れが残つていたのだろうか、あっさり眠れてしまった。

「もう日が暮れたよ、そろそろ起きたらどうだい？」

この声は……諏訪子か、もう夜だというのか。

目を開けて周りを見渡すと、窓があいているのにも関わらず、入ってくるのは太陽の光ではなく、優しい月の光であった。

「目が覚めた？ 約束の夜だよ」

「ああ、そういうえば俺の力を見せるという約束だったな、すっかり忘れていた。

「じゃあここから離れよう、一応直ぐに衰弱して死ぬ程度まで力を出せば、地形を変える程度の力はあるものでな。どこか広い所がいい」

「広いところねえ……まあついてきて」

いま俺が言ったことは本當だ、ただ俺には二つの力があり、片方は人間だつたころから持つていた。万能で代償がない。これは能力ではなく俺の特殊性だ。魔法でもなく、純粹な俺の力だ。

もう一つは吸血鬼になつてから手に入れた力、いわゆる「程度の能力」だ。

代償がある代わりに超強力で山を分断する。しかし後先を考えず、全力で撃てば俺はすぐになんとかしないと死んでしまう程度に衰弱する。（吸血鬼の生命力でだ、普通の人間なら速攻死に至る）

まあ、今田はどうちらも見せてやろううぢゃないか。

諏訪子について行くよつに翼を羽ばたかせた。遅れないよつに飛んでいく。

久しぶりの感覚だが、体は鈍つていないようだ。これなら能力の方も大丈夫だろう。

この世界では、隠す必要もないんだ。存分に恩恵に授かるうぢゃないか！

「ついたよ、これだけ広さがあれば足りるかい？」

「ああ、十分だ。じゃあ早速見せてやるついでじゃないか

俺と諏訪子は広場の真ん中にいる。この広場、天然のものらしく人の手が入っていないらしい。広さも大体 $20 \times 20\text{m}$ くらい、十分だ。これだけあればある程度はできる。あくまである程度だが。

「じゃあまずは俺の力から見せよう。これが俺の紫黒しづくだ」

手で空を切ると、その手に現れたのは剣、紫とも黒とも言えない色をしており、生きているかのような生々しさと光沢を感じるものだ、一応金属ではあるが、感じられる異常性といつ面ではどんなものでも霞んで見える。

「なんだいこれ？ 見たところ無機物みたいだけど……」

「紫黒、無限に体積を変え、自在に形を変え、適応して質量を変えれる。これは俺の体の一部、左手の甲から出てきてるのはわかるが、詳しいことはわからない」

厨「全開だが本当にそりなんだ。紫黒は俺の自在に動く、いわば半身と言つてもいい。

この力のせいだ、俺の人生は狂つたが、今こつしていられるのなら安い対価なのかもしない。

「それじゃあむづつは危ないから、ちよつと離れて」

諏訪子は言われたとおりに少し後ずさり、まあ俺だってそっちの方には被害が行かないよう元気な顔で。

「これが俺の能力、「血を力に変える程度の能力」。自らの力の根源は、自らの血液という神秘性にある。吸血鬼にぴったりの能力だ」

自分の血液の一部を消費、自らを取り囲む霧へと姿を変える。色は俺の紫黒と同じ色だ。

これも俺の左手の甲から発せられているためであつたが……詳しい理由はわからない。

そんなことを考えてこるついで、俺の体の半分が霧に包まれた。

「それが霧の地形を変える力かい？」

「ああ、これをこうすれば地面を掘れるぞ」

左手を前につけだすと、霧がかなりの速度で地面をこすりながら前へと進んでいく、不思議と音は聞こえない。

全てが通り過ぎると、ただ3m近く掘られた溝が、端が見えないほどここじこまでも続いていた。

「できる限り抑えてこんな感じだな」

「言葉が出ないよ、それできる限り抑えただって？ 私もそこまでやるのに結構苦労するのに……」

しかし、俺だつて左手の甲から血が出てきている、もうこの部分だけ痛みになってしまったくらいだ。

「とまあ、とにかくこれで一部だとわかつてくれればいい。それに俺にはまだもう一つあるしな」

コートの中から取り出されたのは魔剣ダーインスレイヴ、一度鞘から抜けば一度生血を吸い、誰かを死に追いやるまで鞘には戻らない、その一閃は的をあやたまらず、決して癒えない傷を残す。血を求める魔剣。

「これが俺が吸血鬼になったとき、最後の吸血鬼に選別をくれてやると言つてもらつたものだ、一度抜けば、生血を浴びるまで決して鞘には戻らない」

「よくわからないけど、とりあえず勝手に抜いたら あいけないのはわかったよ、けどまあそこまで力があつたなんてねえ、もつ私には理解しきれないよ」

そこまでなるのか、まあそれでいいのかもしれないが。強すぎる力は持ち主を滅ぼす。

そんなものは知識としても持つていらない方がいい、そりだろ？
とりあえず簡単にだが、俺の力はを見せた。これで納得してもらえるのだからこれでいいだろ？

「さて、これだけ見れば十分なんだろう？ 戻ろうじやないか

「そうだね、まあ飛びながらでも話は出来る

俺たちは同時に飛び立ち、平行になるように速度を保った。

「ねえ、どうしてそんな力があるんだい？」

「俺にわかつたら苦労はしない、だつたらとつに解決していくぞ、俺が人間を追われることなどなかつたよ」

「そう、何か悪いこと聞いたやつたね」

素直に謝る諏訪子、俺だつてあまり触れられたくないが、こいつち
ではもう違うんだ。

確かに人間たち眼には異形に映つて、忌み嫌われるかもしれない。
けれども、諏訪子たちみたいな存在にとつては何ともないんだ、幻
想郷が出来てからは、本当に人間たちからも受け入れてもらえるん
だから、それまでの辛抱だ、なにもう何千年か立てば時は来るんだ、
それまで我慢すればいいだけの話、それに神や、妖怪たちは俺のこ
とを認めてくれる、それで十分なのさ。

「なあ、神様やつててさ、人間の中に混じつていろいろできたらな
とか思つたことない？」

「そりゃあるさ、私だつてずっと一人なのは嫌だよ。けどまあ今ま
で何ともなかつたんだけどね、まあ正直に言つちゃえば一緒になつ

て騒ぎたいよ。ナビや、それが出来ないから信仰と恩恵という形になつたんだ。私はこの理を覆してまで、壊してまでとは思わない。だつてそれが眞の幸せにつながつてゐるんだから」

…… どうか、言われてみればそんな気がしなくもないな、俺は何か勘違いをしていた…… というわけでもないな、だつて俺のしてきたことは無駄ではなかつたんだから、人間に近づこうとして、それで人間という「ミミコニティ」から追い出されて、それでもここに来られたんだから。たどり着いたんだから。それでいいじゃないか。

俺は世界の理を変えるつもりはない、ただちょっとだけ自分が幸せになりたいだけなんだ。

「なんとなく、わかつた気がするよ。ありがと」

「お礼を言われる」と何かしたつけ? まあ素直に受け取つてえおぐね

「やつしてくれ」

俺は今日、一つの結末と答えを得た、けれどもそれが本当に正しいのかは誰にもわからない。

けどさ、ただ一つわかるのは俺のこれからの一生涯、とんでもなく面白そうだつてことだ。

なんだからって? こんなに素敵な仲間がいるんだぜ、それにわ

「なんだから」

「ねえ、帰つたら一杯やらないかい？」

「酒は久しぶりだな、よし乗つた、俺も賛成だ」

「じゃあ少し急いでか」

夜空に一つの影が一閃した。

縁側から、月を眺めて一人で飲む酒、少し前までは考えられなかつた体験だ。

「ねえ、霧は神についてどう思つ？」

「神か？ 諭訪子みたいのが最初の知り合いだと分かんないかもな」

「なかなか言うねえ」

こんな風に俺は、なんだかんだいつて俺は、人間が大好きなんだ。神様だつて吸血鬼だつて大好きなんだ。

けど、ちょっとだけ歯車が噛み合わなかつただけ。けど、俺がそれに気が付くまでに、あとどのくらいかかるのかな？

「どうあえずや、これから一緒に暮らしていくんだ、よろしく頼むよ」

「それはいいからセリフだ、むしろいつが言つべきセリフだらう

確かにね、と諏訪子が笑う。俺もつられて笑う。

けれど今気がついた。とても重要なことを忘れていた。俺には笑顔なんてものまで、枯れていたのか。

俺は今、本気で心の底から楽しいと思った、そんな思いを込めて笑つた。心の底から今が楽しいと思つた、だからいつやって笑顔になれた。

だからいつして、また生きる気力がわいているんだ。

「それじゃあ、遅くなつたけど乾杯しよう、霧に、私に、この世界に

」「

「そうだな。俺もそんな気分なんだ」

もつ手をつけた酒だけど、乾杯をする。俺はいつしてこの世界に受け入れられた

男は自らの忌み嫌われた力を見る（後書き）

非常に能力紹介が急展開になつてしましました、まあこれから何度も出てくるものなのでこのくらいがいいのかもしれません。じゃないと、全部わかついたら面白くありませんし……まあこんなものだとわかつてくれればOKです。

ダーインスレイヴはそうですね、気になる方はwikiを見てください。まあ僕也要約して説明したんで、あれが分かつていればほとんど説明したようなものです。

これからは、素直に日常生活を書こうと思つています。
諏訪大戦とかいつ出すか考えなきや……（汗

歴史は変わらなくても波紋は広がる

俺は夜を駆ける、それが俺の生き様だから。血を求める、それが必要なことであり、血らの糧となるから。そして、今新しい犠牲が生まれた。

「うん、鹿の血もなかなか……」

野鹿の首に口を当てて、食事を開始する霧。もうほん肉までおいしくいただく。

本当なら人間であった方がいいが、別に大丈夫なようになっている。それが二千年の歳月の力。力は強力になり、それと同時に臨機応変なものとなる。

これが毎日彼の食事、もうすでに諏訪子のもとに住み始めて早一ヶ月。特に代わり映えのない日常に退屈はなく、むしろ充実様で感じていた。

諏訪子の手合わせに何度か付き合つた。神の力は強力であるが、それでも二千年の歳月を覆すほどには至らない。ただし、これには？ ただし夜に限る？ という一文をつければの話だが。

「なんか、ただしイケメンに限るって言われて虚しくなるのがわかる気がする……」

確かに夜の帝王である彼も、昼間はただの妖怪にすぎない。それは昔から決まりきっていることである、人間さえも認識していることだ、いまさらどうこうしようとういう気持ちはない。ただ、何か知ら方法があるのなら別だが、それが起こり得ないことは、おそらくこここの世界の住人の誰よりも詳しいことだろう。それが彼の運命、すべてを知りえるものとしての定めなのだからどうしようもない。

そして今、今度は動物ではなく妖怪がその力の餌食となる瞬間がやつてきた

現れたのは妖怪、姿から察するに蜘蛛の妖怪、夜中に獲物を求めて徘徊していたところ、俺という標的を見つけたということだろう。

感じられる明らかな殺意は、捕食対象にしか向けられないものだった。
ただし、相手が悪かつたけれども……

「久しぶりに、全力でお相手するか。一千年のうつぶん晴らしになるといいけど……」

期待はあまりできないだろう、力はあまり感じられない。

先手を譲らせてみる、蜘蛛らしく糸をはいてくるが……俺には無意味だ、そんなもの止まって見える。

紫黒を手に纏う、形は……大きな爪にしておこう。

糸を避ければ、全速力で本体へと接近していき腹を貫く。一連の動きは洗練されたものだが、その場の対応はできないだろ？、あくまで決められた型を再現しただけなんだから。

そのまま虚空へと抜けた霧の体は、今の成果などなかつたかのよくな素振りさえ見せた。

彼にとつては当たり前の結果なのだから、仕方のないことなのだが。全力を出し切る前に終わってしまった勝負を悔やむ様子はあるが、彼にはむしろそれでよかつたのかも知れない。それはなぜか？

「最近西日本の方が騒がしいらしいし、神様と戦うのならそちら辺の妖怪はオーバーキルの方がいいだろ？しな」

そう、最近西日本の方で次々と先住の神たちを破り、配下に従えているという国があるという話を聞いた。間違いなく神奈子のこところに違いない。

もうすぐ諏訪大戦が始まるということだ。

おそらく自分が加担しても、結果は変わらないようになっているのだろう。けれども今までの諏訪子に借りっぱなしの恩を返すにはこの場しかない。

自分が参加し、できるだけの戦果をあげることで、洩矢神の評判をあげるくらいは自分にもできるだろ？。おそらく一番奮闘した神として歴史に名を残せば、諏訪子もまあ、悪い気はするだろ？が満更でもないだろ？。

そのため、自分が大戦に参加し、歴史を覆すぎりぎりのことをする
のは俺の中では最早規定事項だ。つまり神奈子に対応できる力がほ
しい、そのためにはそこら辺の妖怪などはオーバーキルでいて、な
おかつ強敵との戦い方を磨かなければならぬ。なかなかに複雑な
悩みだが、自分には力がある、おそらくぶつけ本番で慣れていく
という戦法もありっちゃあり、というわけだ。まあそれが意味する
ことは一つではないのだが……

要するにだ、神奈子と戦うにしても別に戦い方というものを身につ
ける必要はないが、その代わりに現地で対応法を習得しなければな
らない。

もしかすると諏訪子と神奈子の頂上対決という可能性もあるわけで、
この根回しはすべて無駄になる可能性もあるが、おそらく神奈子の
味方の神様は貧弱ではあるまい。

まとめると、今の自分に必要なのは対応力だ。それだけだ。

こんなに長々と俺の戦略を読者の方々に話させてもらつたがそう言
うことだ、まあ無駄にはなるまい。

とにかく、もうすぐ諏訪大戦がはじまるということは間違いないの
だ、それなりの蓄えも戦力も諏訪子は用意してある、ミシャクジ達
の強さはわからないけどもそれなりの戦力にはなるはずだ。
せいぜい負け戦を全力で行うとしよう。恩人の名誉のために。

「さて、もうすぐ夜明けだし、諏訪子も起きてくるだらう。それから神社に参りますか」

今日も一日が始まる
いや、もうひん俺にとつては終わるだよ。勘違いしないでくれよな。

帰つたら諏訪子がもう起きていって、そのことについて少し話したが、
まだ先のことだと思つていいようだ。
それもそうだらう、だってまだ噂が広まつてへる程度のことなのだから、騒ぎからほほ遠いということだ。

とにかく、俺は既に就く」とこな。

「あー、霧も寝ちゃったし暇だなあ

縁側に座り、足をぶらぶらさせる諏訪子。神の威厳など感じさせぬ
ここもなかつた。

しかし、戦が確実に迫ってきているなかでの戦力強化という面の仕事はなにも怠っていない。既にミシャクジ達もいざ戦が起これば戦つてくれるよう約束してある、それは諏訪子に対する信頼の表れか、それともただ自分たちの居場所を守りたいだけか？ それは誰にもわからないことだ。

「お？ 参拝客じゃないか、朝っぱらから熱心だねえ」

ヒツセツとのぞき見をする諏訪子、神がそんなことしていいのかは知らないが、それでも好奇心には勝てないようだ。

「どんなこと話しているのかな……？」

「国境の方の村から聞いた話なんだけどさ、隣の国までついに占領されたらしくよ」

「はあ、それじゃあ西日本はほぼ全滅だなあ」

「そうそう、神様がなんとかしてくれないかねえ……」

……隣の国まで？

自分が思つていた以上にことが進んでいたことに驚きを隠せない、また、ここまで迫つてきているにも関わらずあちからのことは何もつかめていない、それがどれだけ恐ろしいことかわかっている諭訪子は、眠りについたばかりの同居人にそのことを告げに走る。

強引に畠を覚ませ、寝ぼけ眼の霧に全てを話した頃にお互いの考えは一つにまとまっていた。

そう、ミシャクジ達にこのことを伝え、全面戦争の準備を今すぐ行整えること。

自分たちは貴重な戦力であると同時に、決してかけてはならないまとめ役なのだ。その任務をこなさなくてはならない。

明日にでも諭訪大戦があ始まる、霧はそつ認識した、おやうく相手は奇襲を作戦としているはず、ならば畠には畠を、逆にこちらがしてしまえばいい。

けれども堂々と宣戦布告をしてきたならば、こちらも全力で対処する。

いつの間にか諭訪子はどこかに行ってしまった、おそらく国境にミシャクジ達を集めるためだろう。

今日の夜にでも俺も移動することになる、準備ぐらいは済ませておこう。

とはいってもそんなのはないんだけどな、せいぜいたっぷり寝ておくとしようか。

それから諭訪子が返ってきたのは、夕方のことだった。

そして夜が更け、零時を回った後に俺は諏訪子にこのように伝えられた。

まず、夜になつたら国境に自分たちも移動する、相手は人間以上の存在らしいから、こちらもミシャクジ達と俺たち一人が全戦力になるということだ。

そして夜の間に、俺には神奈子たちがいつごろ攻めてくる探つてきてほしいとのこと、おそらく俺単体を送り込むということだろう。見つかつた場合はこちらからの宣戦布告でも送つておけとのこと、要するに奇襲の線をなくしたいわけだろう、それが諏訪子の考えた戦略なんだから文句は言わない。

要するに、夜限定の俺の強さを十分に利用するというわけだ、十分な戦略家ではあるのだろう、単純だが、使えるものはすべて使う精神は称賛に値するものだ。

とにかく今夜が決行の日だ。もう既にあたりは暗闇に包まれている、俺の準備次第でいつでもいいらしい。

「じゃあ今すぐこでも言つてこやつ、早い方がいいんだろ?」

「悪いね、それじゃあ幸運を祈るよ」

俺は返事をせずに飛び立つた、しかしこのままでは見つかる可能性も大きい。

俺の気配は夜に紛れる、気配遮断と同じような感じで見ていいだろう。それでも念には念を入れておくのが一番だ。

まあ、俺の五感は夜にはより一層冴えることとなる、相手がこちらを見つけるのより先にこちらから相手を見つけられるであろう。

それよりも怖いのはこいつが侵入してからだ、神奈子のような力のあるものまでごまかせるか？ それはもうかけでしかないであろう、とにかくやつてみなければわからない。

そのまま迂回すれば気づかれることなどあるまい。
さて、早速大きい気配を見つけた、しかしこちらに気づいている様子はない。

このように、俺は確実に本丸へと移動する。本丸とはいっても拠点は一つしかないわけだが。

そして俺は本拠地までたどり着いた、中には神奈子の姿も見える。俺は近くの木の枝にとまり、できるだけ気配を小さく保つ、不特定

多数の人間から逃げてきた俺にとってのこれらはお手の物だ。

そして丁度行われている会議の内容に耳を傾ける。

なんでも明日の日が明ける前に攻め込んでくるようだ、今の時期で言つたら大体日の出の一時間前だらう。俺にとって若干有利な時間である。

その後も話の流れを聞いた、その他には特にひりひりの利益となつてゐる話はなく、そのままお開きとなつた。

そして部屋には神奈子だけが残され、俺もそろそろ帰るとするか。

俺は再び空へと駆ける、十分もあれば諏訪子のところに戻れるであろう。

俺が戻ると、諏訪子はすぐに結果を聞いてきた。

「明日の朝、日の出の一時間くらい前に攻めてくるやうだ

「そう、だったらまだ一日あるし余裕もあるみたいだね。とにかく、あとのことは私がやっておくからもう休んでいいよ

「わかった、じゃあそいつをせてもいいよ

さて、ちよっと早いけど寝ておくか、じつは「田中戦」ひとつないかもしないんだから。

さて、決戦は明日なわけか。せいぜい頑張るとするか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449z/>

東方吸血鬼

2011年12月20日18時50分発行